

中学生が体験学習

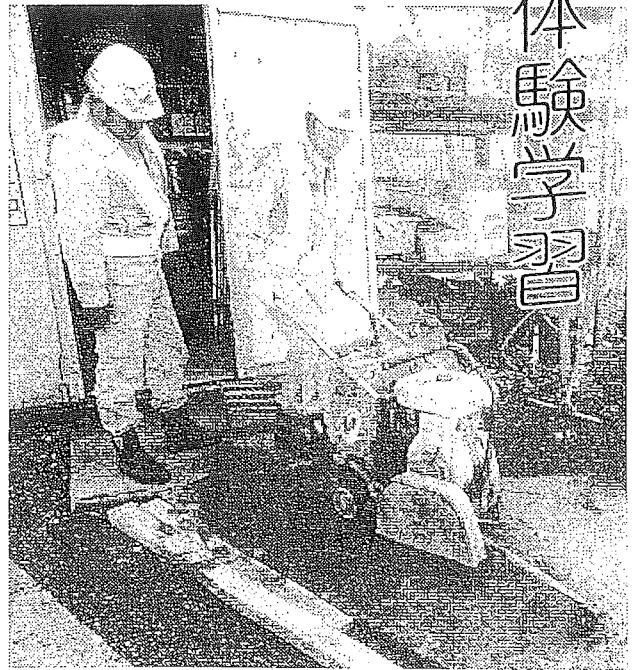
県建設業青年会(佐藤渉会長)は10日と11日の2日間、仙台第一中学校の生徒2人を受け入れ、体験型現場学習会を実施した。中学生の受け入れは同青年会では初となる。

同学習は仙台第一中学生の職場体験学習の一環として、同会が相談を受けたことから実施したもの。地域の明日を担う中学生が建設業に興味を持つよう、同会の工夫を凝らしたさまざまなカリキュラムが実施された。

初日は仙台建設業青年会所属企業の柴田建設工業(仙台市太白区、柴田充代表取締役)や栗村建設興業(仙台市若林区、栗村英樹代表取締役)の工事現場、仙台アスコン(仙台市宮城野区、坂本晃代表取締役)のプラント工場を見学。

2日目は現場実習として、柴田建設工業の資材置き場で舗装板の切断から破碎、下層路盤の敷き均し、表層工に至るまで順を追って体験した。作業にあたっては中学生1人につき作業員2人ずつが補助を行い、しっかりと安全を確保しながら進められた。

地域担う若手育成



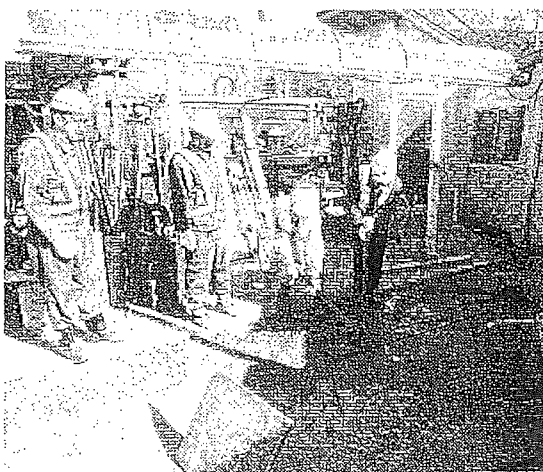
中学生1人につき、2人の補助員がしっかりとサポート

作業を通して、生徒のひとりの齋藤剛大くんは「振動ローラーを使った敷き均しが難しかったが、体を動かすのは好きだし、よい体験ができた」と述べ、ものづくりが好きだという山本有希人くんは「熟練の技が必要なることを学んだ。匠の技を身につけていきたい」とそれぞれ建設業への興味が深まったと語った。

県建設業青年会 初の中学生受け入れ

県建設業青年会の副会長を務める栗村建設興業の栗村社長は「自分たちの仕事を見直す機会にもなるため、今後、要望があればできる限り応えていきたい」と若手の育成に向け、意欲を見せた。

「中学生たちに現場で働く人たちが、日々どのように考えて仕事をしているかを伝えられたと思う。今日の経験をもとに将来建設業界への就職も視野に入れてもらえれば」と期待を寄せた。



舗装工事の一連の流れを体験した

建設通信新聞

宮城県建設青年会 中学生に現場実習

舗装の実践プログラム体験

宮城県建設業青年会は11日、仙台市太白区の民有地で、中学生を対象とした初の現場実習を行った。職場体験学習先に建設業を希望した仙台市立第一中学校2年生の男子生徒2人が、舗装工事の一連の作業を実体験した。

10日から13日までの4日間に行われていた職場体験には、山本有希人さんと齋藤剛大さんが参加。仙台建設業青年会が中心となって企画した前半2日間のうち、10日は仙台市内で行われている道路工事の2現場と仙台アスコンのプラント工場を見学した。

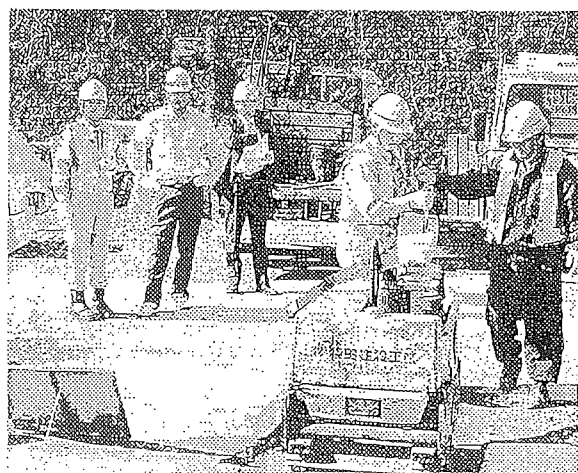
11日には、太白区羽黒台にある柴田建設工業(柴田充社長)の資材置き場で、舗装の打ち換え工事を体験。作業員と現場監督の役割を交互に入れ替わりながら、コンクリートカッターを使用した既設コンクリートの切断作業やその破砕、路盤の敷均し、振動ローラーを使っての転圧、表層の合材敷均しまで、舗装の工程を網羅した一連の作業を経験した。

さらに、公共工事で使用する黒板を使いながら、着工前から出来形までの一連の進捗状況を収めた現場写真を撮影・編集し、発注者に提出するような図書の作成まで行うなど、実際の工事に携わるような密度の濃い実習となった。

齋藤さんは「建設業は力が必要ないイメージがあったが、敷均しは思った以上に大変だった。体を動かすことが好きなので仕事を体験できて良かった」、山本さんは「ものづくりが好きで実習に応募した。切断は力の調整が難しかったが、良い経験ができた。将来を考える上で参考になった」と話した。指導に当たった柴田社長は「実習先に建設業を選んでくれて素直につれしい。実習を通じて、さまざまなことを考えながらつくっていること、つくったものが社会に存在し続けていくというやりがいを感じてほしい」と、実践的なプログラムにした意図を語った。

仙台建設業青年会の栗村英樹会

長は「担い手確保が課題となっている中、建設業が職業の選択肢の1つになるきっかけになれば良い。今後も要請があれば積極的に協力していきたい」と語った。12、13の両日は、東北地方整備局仙台河川国道事務所と共催で実施している。



建設産業新聞

中学生が 職場体験学習

宮城県建設業青年会
が受け入れ

宮城県建設業青年会(佐藤渉会長)は、仙台市立第一中学校の職業体験学習の希望を受けて、柴田建設工業(柴田充社長)で舗装作業などを実際に体験する「実地授業」を行った。

仙台第一中学校の職場体験学習は、今月10日から13日までの4日間行われ、前半の2日間を柴田建設工業の作業現場などで行い、後半2日間は東北地方整備局仙台河川国道事務所で実施。2年生の山本有希人君と齋藤剛大君の2人が「ものづくりが好き」、「体を使うの

がいいと思った」という理由で建設業の体験学習に参加した。

体験学習は初日の柴田建設工業の作業現場見学に続き、2日目の11日は同社の資材置き場で、幅1.5m、長さ8.5mの間を作業ごとに確認しながら、既存のコンクリート片を取り除いたり、5cmの深さまで転圧し、コンクリートを敷き詰めるまでの舗装の一切を体験。柴田社長は「ただ作業をするだけでなく、作るというイメージをしっかり持つことが大事だということも伝えたかった。いずれ建設業に関心を持ってくればいい」と期待を寄せた。

栗村英樹副会長は「建設業は建物を建設するだけではない。地震の際の

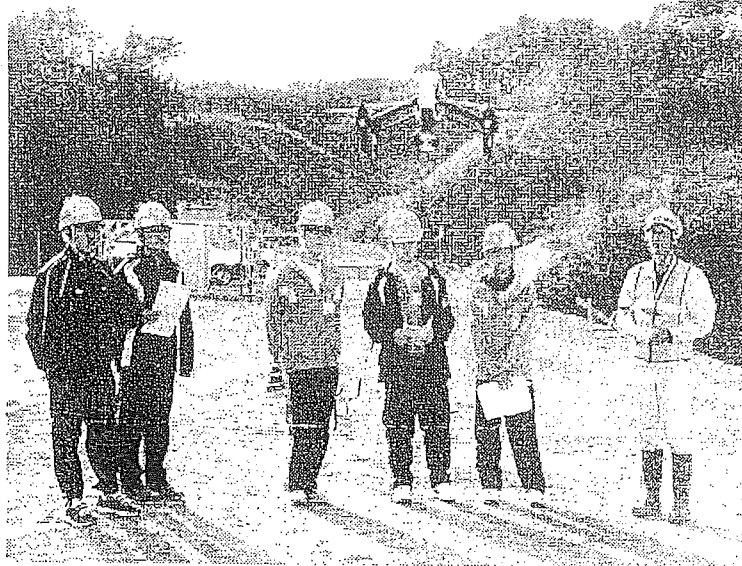


ガレキ処理や除雪、道路整備などさまざまなジャンルがあることを知ってほしい。中学生の受け入れは初めてだったが、事故のないように配慮してもらった。今後も要望があれば、受け入れは継続したい」と語った。

中学生が 職場体験

仙台河川国道

国土交通省仙台河川国道事務所は中学生の職場



工事現場で利用されているドローンに、興味深げな中学生

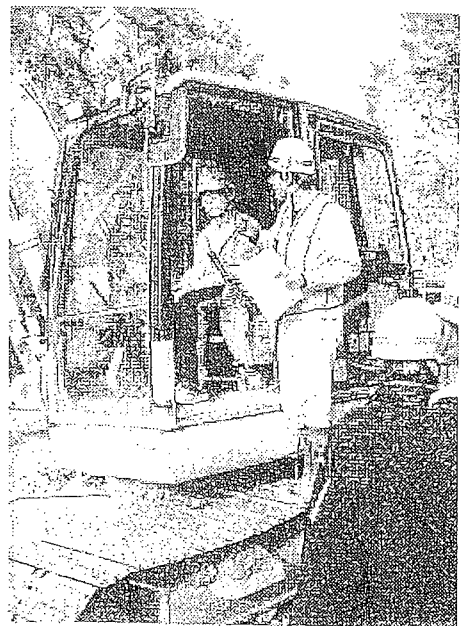
体験学習を受け入れ、12、13日の2日間、同事務所が

管轄する復興工事の現場を案内した。13日には本吉郡南三陸町内で実施している三陸沿岸道路の工事現場で体験学習を行い、中学生は道路が造られていく様子を見学した。

同事務所が受け入れたのは、仙台第一中学校と多賀城中学校の男子生徒5人。初日に仙台湾南部海岸の防潮堤整備などを見学した生徒は、2日目に南三陸町まで足を延ばし、復興が進む町の様子を肌で感じた。

同町内で見学したのは、三陸沿岸道路を構成する

佐藤工務店の現場では、バックホウに乗車体験



南三陸道路(志津川IC〜歌津ICの7・2km)。同区間に建設されている南三陸道路4号トンネルや大上坊川(だいじょうぼうがわ)橋などができる様子を、写真を撮りながら興味深く見学した。

道路本体工事を進める佐藤工務店の現場では、重機の運転席に乗ったり、測量機を使った距離の測り方などの説明を受けた。工事現場でドローンを使い

ドローン空撮に驚き

りに感心していた。

建設新聞

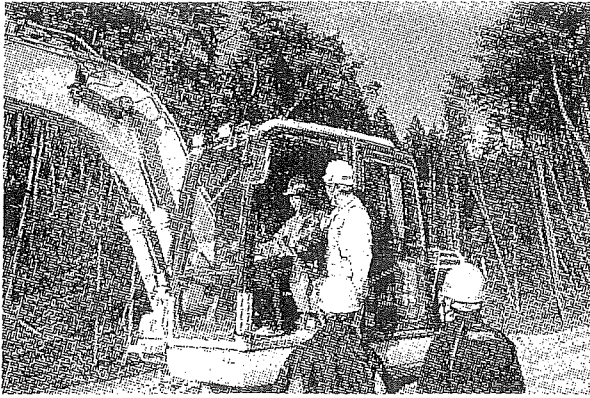
大型建機の迫力に驚嘆

と台
会仙
年局
青局
整備
宮整

中学生の工事作業体験

宮城県建設業青年会(佐藤渉会長)と東北地方整備局仙台河川国道事務所は13日、共同で南三陸町で建設が進む三陸沿岸道路・南三陸道路の現場において中学生の工事作業体験を実施した。参加した生徒からは「建設機械の迫力がすごい」といった声が上がった。

職場体験学習の一環として行ったもので、当日は仙



バックホウの運転席を体験

台市立仙台第一中学校の2年生2人と多賀城市立多賀城中学校の2年生3人が参加。生徒たちは、仙台河川国道事務所計画課の林田浩明専門職ら東北整備局職員との先導のもと、南三陸町で建設が進む三陸沿岸道路・南三陸道路(延長117.2キロ、幅員13.5メートル、2017年度開通予定)の4号トンネルと大上坊川橋、



ドローン・興味津々

蛇王地区道路改良工事の3現場を見学した。

このうち、4号トンネル(延長1406メートル)では、実際にトンネル内部を歩いてみて、工事中のトンネルを体験。トンネルを抜けた先では南三陸町志津川方面に向かつて建設が進む大上坊川橋(延長1146メートル)の工事の様子を見学した。

その後、反対側の気仙沼市方面にトンネルを抜けて、その先で整備中の蛇王地区道路改良工事の現場を見学。ここでは、佐藤工務店(加美町 佐藤敦社長)の協力のもと、実際に28ト大型ダンプトラックとバックホウの運転席に座り、建設機械を体験するとともに、測量機器を用いて距離を測定したほか、ドローンを活用した情報化施工の様子も学んだ。

仙台第一中学校の山本有希人さんは「初めて建設機械に乗ってみた。迫力がす

ごい」、多賀城中学校の八島佑斗さんは「バックホウは工事現場で見たことがあるが、28トダンプトラックは初めて見た。実際に動かしてみたい」と話した。また、多賀城中学校の今野正大さんは「3つの現場を実際に見て、建設現場がとても分かりやすいものだと感じた。建設業にも少し興味が湧いた」と感想を述べた。